

里山の民間信仰―仰木の地蔵信仰について―

加藤
賢治

Name :

KATO Kenji

Title :

The Folk Religion of Satoyama: A study of Religious Beliefs surrounding Jizo Statues in Ogi

Summary :

Ogi, a town at the foot of Mt. Heiei's Enryakuji Temple, is known for its numerous stone Jizo statues. Here I will offer an analysis of the religious beliefs observed in Satoyama by examining the way in which such beliefs and daily life are intertwined with Mt. Hiei.

第一章

(一) 仰木集落の概略

大津市北部、比叡山延暦寺三塔十六谷の最北部に位置する修行道場横川^{よかわ}の麓に「仰木」という集落がある。その集落の名は、横川の霊木を仰ぎ見ることによって由来しているという。すなわち、仰木という集落は、平安時代末期から中世末期に至るまで比叡山延暦寺の荘園として延暦寺と深い関係を築きながら発展してきた。また、仰木の庄の鎮守社である小椋神社（旧称・田所神社）は、『延喜式神名帳』に記載される滋賀郡八座の一つであり、『日本三代実録』貞観五年（八六三）十二月三日条によると、従五位下に叙され、古くから朝廷とも深く繋がっていたと考えられる。（写真1）

仰木の開創については、近世後期に写された『江州高日山由來』によると、広大な山野であった仰木はかつて上野山とよばれ、上野山宗治郎という老翁（日吉大宮権現）が斧を持って切り開いて土地を開発し、奥山に入った時に賀太夫（伽太夫）という仰木の地主神と出会った。ここでは、仰木は最初に下北坂本（下仰木）から開発が始まり、次に上北坂本（上仰木）、上



写真1: 仰木の鎮守社である小椋神社（旧称：田所神社）



写真2: 親村置文『仰木之庄田所大明神親村由緒』部分

北坂本から辻ヶ下、下北坂本から平尾というように順次開発されたとされる。

一方で、「親村〔註1〕」と呼ばれる宮座の共有文書・親村置文『仰木之庄田所大明神親村由緒』（写真2）によると、『江州高日山由来』で言うところの地主神である伽太夫は、翁に姿を変えた山王大師（比叡山の地主神）と問答を繰り返し、最終的にこの地（葉広の郷＝仰木）を収め、開墾することを許されたとしている。

また、これとは別に親村の古老につたわる伝承によると、天智六年（六六七）、第三十八代天智天皇が都を大和の飛鳥から近江の志賀に遷都する際、大和葛城山に住む伽太夫という仙人

が同行した。伽太夫は、帝が住む都に近い場所に浄地を求めて湖辺伝いに北上し、現在の衣川にあった斧^{きき}塚から山を見上げると瑞雲がたなびく神のお告げを感じし、道を切り開いて山に入った。その山中で清い湧水が湧き出る浄地を見つけ、ここに大和の丹生川上神社の下社から閻魔大神を勧請して、滝壺神社とした。ここが現在の上仰木の地にあたり、はじめは葉広の郷と呼ばれたのだという。

このように仰木には、二つの開村神話が存在するという意味で非常に稀有な集落であるが、いずれの神話も比叡山延暦寺や日吉大社の神仏が混交した権現が登場するという特殊な物語が伝承されている。要するに、仰木に暮らす人々は、平安京の遷都とはほぼ同時に開かれた新興仏教宗派である天台宗の聖地の麓であるというこの地において、延暦寺や日吉大社という大きな宗教の影響を少なからず受けてきたのである。

（二）石仏の集落「仰木」

伽太夫が仰木の先駆けとした滝壺神社は、仰木地区の氏神である小椋神社の奥宮として崇拝され、平成二十九年（二〇一七）、祠や周辺の整備を終え、御鎮座二三五〇年の記念式典（式年祭）が開催された。（写真3）

滝壺の水は、天神川となって仰木の集落を貫流し、美しい棚田の景観で知られる田畑を潤している。古代からその歴史を刻む仰木集落は、近世にはほぼ現在に近い集落が形成され、小椋神

社を中心に上仰木、辻ヶ下、平尾、下仰木の四つの字に分かれ、静かに平生の暮らしが営まれている〔註2〕。

戦後の高度経済成長による変化も、この仰木では緩やかに進み、四つの集落では、傾斜がある棚田での米づくりを中心に、神仏をもとにした年中行事が日常的に行われてきた。

以後、農業の機械化を進め、生産力の向上を目指して棚田の土地整備事業が進められ、近世以降傾斜地に伸びていた小さなぐにやぐにやした田圃の畔（あぜ）は、直線に整備され、農機具が動きやすく効率の良い長方形の田圃に改良されていった〔註3〕。

その整備の際、土を掘り返すと多くの石仏が掘り起こされ、畝の袂に安置された。おそらく、近世につくられた石仏が水害などで、土中に埋もれていたものと思われる。ひと所に数十体のもの石仏が集まる石仏群が、至る所に存在する。

ただ、注目すべきことは、掘り起こされた大量の石仏だけでなく、この地域には非常に多くの石仏が存在し、その一体一体には朝夕に生花が生けられ、浄水が供えられている。この石仏、

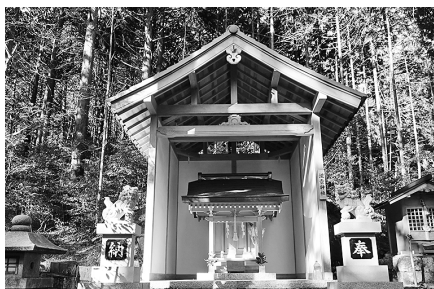


写真3：式典に合わせて祠や周辺の整備を終えた現在の滝壺神社本殿

いわゆる仏様は一体何者なのであろうか。この地に暮らす人々は、一様に「お地藏さん」と呼んでいる。一般的に見ても西日本では石仏自体を総称して「お地藏さん」と認識しているところがあるが、実際には、阿弥陀仏や道祖神、庚申さん、そして地藏さん、もちろん多くは風雨にさらされ磨耗が激しく姿がわからなくなっているものもある。（写真4）

このような仰木集落におけるお地藏さん（石仏）に対する信仰は、どのように浸透したのであろうか。その必然性について、次章で検証してみたい。



写真4：恵心僧都源信自作と伝わる六体地藏が安置される地藏堂（上仰木墓地）

第二章 仰木における地藏信仰

（一）源信と『往生要集』

地藏信仰とは、地獄と極楽に関わる浄土思想と深いつながりがある。その浄土思想が醸成されたのが仰木の地名の由来となった比叡山の北方「横川」の地である。横川は最澄の後を継いだ慈覚大師円仁（七九四―八六四）が開いた修行道場で、延

曆寺中興の祖といわれる慈恵大師良源（元三大師）（九一二～九八五）によって四季講堂（元三大師堂）を中心に、一大修行道場として発展した。

そして、その横川で浄土思想をまとめ、わかりやすく日本全土に発信したのが、良源の高弟の一人である恵心僧都源信（九四二～一〇一七）である。源信は、寛和元年（九八五）、横川の恵心堂で『往生要集』を執筆し、浄土関係の仏説や諸論、經典から、地獄や極楽浄土に関する記事を拾い集め、「厭離穢土」「欣求浄土」^{註4}を訴えた。全一〇章の中でも、第一章「厭離穢土」に語られた「六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天）」という魂が転生するという六つの世界の解説に重きが置かれ、特に「地獄」の記述において、源信は全身全霊を注いだと思われる。

源信は、伝統的保守的仏教の教義書として知られる『俱舍論』^{くしやろん}に従って、等活、黒繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、阿鼻の八大地獄から書き始め、凄惨なる地獄の恐ろしさを文字で表現した。源信が描いた恐ろしい地獄絵巻は、鎌倉時代以降、文字通り「六道絵」や「地獄絵」などの絵画として描かれるようになり、文字を読むことができない一般庶民にまでその恐ろしさが広まっていくのである。

その一方で『往生要集』には、このような地獄の恐ろしさだけでなく、どうすれば地獄でなく、極楽へ行けるのかという方便も書かれている。すなわち、阿弥陀仏の世界である極楽浄土

の素晴らしさを紹介しながら、具体的には、南無阿弥陀仏という念仏を唱えることや阿弥陀仏を観想することなどが説かれ、極楽へ行くための方法が様々に語られるのである。

（二）『往生要集』に登場する地蔵菩薩

その方便の中に、地蔵菩薩が登場する。『往生要集』「第二欣求浄土」の「七・聖衆俱会の楽」の中で源信は、地蔵菩薩が地獄での苦しみを抜く「地獄抜苦」を「十輪經」から引用して紹介している。横川における源信やその師良源の時代は、上級貴族社会の元にこの信仰が広がり、『左経記』^{註5}の記録から、良源が始めた地蔵講が横川を中心として行われていたことがわかる。ただし、この時代は、阿弥陀如来と共に、観音菩薩や勢至菩薩らと並んで地蔵菩薩が存在し、地蔵菩薩が独立した形で信仰されていたわけではない。

速水侑氏の論考「日本古代貴族社会における地蔵信仰の展開」によると、

「院政期に入り、天台教団の頽廃が顕著となるにつれ、源信の法流に連なる横川浄土教家（地蔵説話に現れる僧侶等）達は、山を離れ、別所に隠棲し、あるいは京洛に出て布教し、貴賤の帰依を集めた。横川浄土教の地蔵信仰は、地蔵説話と横川浄土教家の関係から推察される如く、おそらくは彼等によって、地蔵講・地蔵会等を通じて、民衆の間に広まったのであり、院政期の民間地蔵信仰は、一面において、貴族社会地蔵信仰（こと

に横川地藏信仰)の民間下降として理解することができるのである」と述べ、良源や源信が亡くなった後、横川の宗教活動が世俗化し、浄土の教えを訴える僧侶たちが、山を降りて喜捨を募って活発化したというのである。

そして注目すべきは、山の上である横川にあった地藏信仰は、あくまでも上級貴族に支えられ、阿弥陀仏に従属した形であったのに対し、山を降りて、民間に浸透した地藏信仰は、阿弥陀仏から完全に独立したものになっていくのである。

速水氏は、論考の中で当時の仏教説話集の代表とも言える『今昔物語集』に、地獄蘇生譚、すなわち地獄に落ちた人たちが、何らかの事情(經典の写経や、仏に祈るなどの作善行為)によって罪を許され、世に蘇生するという説話の中で、特に地藏菩薩が登場する説話が極端に多いと指摘している。

(三) 地藏菩薩が登場する仏教説話

それでは、どのような説話が『今昔物語集』で語られたのだろうか。特に興味深いものを紹介してみる。

『今昔物語集』巻第十七「三井寺浄照依地藏助得活語第十九」に、三井寺の浄照という僧侶の蘇生譚がある。浄照が、十二、三歳ばかりの頃、他の子供と遊んでいた時に、戯れに自分の手で地藏菩薩を彫って、遊びで花を供えたり、僧侶の真似をして供養するようなことをしていた。その仏像は、いつしか忘れ去られ、堂の隅に置き去りになったまま、やがて浄照は出

家していつしか尊い僧侶となった。しかし、三十歳を過ぎた時、病にかかって死んでしまった。

すると恐ろしい地獄の使者が迎えに来て、地獄に連れて行く。地獄では多くの罪人が泣き叫びながら激しい苦しみを受けている。この地獄から抜け出したいと願った時、小さな僧が現れ、自分は、かつて浄照がつくった地藏菩薩であるという。あくまでも浄照が戯れにつくったものであるが、そのことによって地藏菩薩と浄照に縁が結ばれ、生前からずっと守ってきたのだという。ちょっとした隙に、地獄に落ちてしまったようだからと言って、閻魔大王の前に行き、浄照の罪を許してもらえよう訴えた。浄照は涙を流して喜んだ途端、蘇生したという。その後、地藏菩薩を厚く信仰し、高僧となって生涯を全うしたという。

もう一つは、『今昔物語集』巻第十七「聊敬地藏菩薩得活人語第二十四」である。主人公は清和源氏の祖で勇猛な武将として知られる源満仲の郎等(家来)である。この郎等は、猛々しい気性の男で、生き物を殺すことを日常の生業として、善根をすることも全くなかった。ある時、広い野原で鹿狩りの途中、一頭の鹿を追いかけて馬を走らせていた。ある寺の前を通過した時、馬を走らせながら一瞬寺の中を覗くと、お堂の中に地藏菩薩の像が立っていた。郎等はこれを見て、ほんのちょっと敬い心を起こし、左の手で笠を脱いで、それだけでその場を駆け去った。

その後、郎等は病にかかり、ついには死んでしまった。ふと

気づくと閻魔大王の前にいて、自分の罪状が述べられている。周りには、極悪人たちが獄卒の激しい責めを受けている。その恐ろしい光景を眺めながら郎等はなんとか救われる方法はないのかと嘆いていた。するとその前に小僧が現れた。その小僧が言うには、自分は郎等が一瞬敬い心を起こして笠をとって見た地藏菩薩であるという。あなたは極めて重い罪を背負っているが、一瞬であつても私を敬う心を持ったので、是非ともこの地獄から助けたいと思うという。

郎等はあるがたふし、必死でこの小僧を拝んだ瞬間、蘇生した。郎等は妻にこの話をして心を入れ替え、以後一切の殺生をやめ、地藏菩薩はかりそめにも敬う心を持った人ですら救ってくださるのだから、ましてや心を込めて長年祈念し続ければ、必ず救ってくださること間違いない。人々はこの話を聞いて、専心に地藏菩薩にお仕えすべきであると、語り継がれるようになったという。

(四) 民間に広まる地藏信仰

源信の『往生要集』に曰くは、日常的に阿弥陀仏を熱心に拝んでいるものは、死後六道輪廻転生から逃れ、極楽浄土へ生まれ変わることができるのである。しかし、地藏菩薩に関するこれらの説話は、本来、日常的に神仏を厚く信仰していた善人が、救われていくのではなく、それができずに地獄に落ちてしまった罪人を地藏菩薩が救う話である。それも興味深いのは、生前、

一生懸命地藏菩薩を信仰していたのではなく、ほんの一瞬、地藏菩薩を拝んだ、あるいは、戯れに地藏菩薩を彫ったなど、ちよつとした縁によつて地獄から救われるのである。

例えば上級貴族は、日常的に作善が行えるが、庶民は、生まれてそれまでの年月に仏教に触れることができず、既に殺生など仏門にあつてはならないことをしてしまっている前提がある。この庶民の心を救うには、地獄に一旦落ちても救ってくれる地藏菩薩を独立させて信仰する必然性があつたということが出来る。

中世初期にはこのような仏教説話が、横川から降りてきた浄土教家である僧侶たちによつて語られ、既に殺生をしている罪悪人の心を救い、作善に向かわせることをしながら、僧侶は信仰を広め生業を続けたと想像できるのである。

先述の通り、仰木集落は、浄土教が発祥した横川の麓にある。全国に先駆けて地藏信仰が民衆に降りてきた場所であることに間違いない。おそらく早くから、仰木集落到地藏講や地藏会などが行われたであろう。そしてそれに伴って石仏も誕生していったと考えても不思議ではない。(写真5-11・5-13)

次章では、現在仰木の石仏に注目している人々や、今も仰木に暮らす人々がどのように地藏菩薩と触れ合っているのかを検証してみたいと思う。



写真5-2：辻ヶ下真迎寺飛地境内地藏堂 国重要文化財木造地藏菩薩立像が安置されている。
撮影：大原歩



写真5-1：辻ヶ下真迎寺飛地境内地藏堂 撮影：大原歩



写真5-3：地藏堂では今もなお地藏講に関連する行事が行なわれている 撮影：大原歩

第三章 仰木に見られる民間信仰のかたち

(一) 地藏プロジェクトの取り組み

この仰木の地に多数点在する「お地藏さん」と呼ばれる石仏群に注目した人たちがいる。平成十二年(二〇〇〇)に、「地藏プロジェクト」と名付けられたプロジェクトチームが発足した。メンバーは、当時の成安造形大学の教職員と学生や卒業生などで構成され、石仏群が散在する仰木地区と、隣接する新興住宅街の「仰木の里」も含めた地域を調査することから活動は始まった。

プロジェクト発足のきっかけは、当時から、この仰木地区にアトリエを持ち、人と自然が共生する空間が「里山」であると定義づけ、仰木の「里山」を、作品を通して世界に発信した写真家の今森光彦氏(現在成安造形大学客員教授)の気づきによる。今森氏は、この里山をフィールドに写真作品を撮影する中で、被写体の一つである石仏に興味を持たれていたところ、当時の成安造形大学の教員と、集落のどこにどのくらいの石仏があるのかを調べてみようということになったという。(写真6)

現在、地藏プロジェクトの代表を務めるのは、谷本研氏(成安造形大学助教)。谷本氏が地藏プロジェクトに合流したのは発足から二年後の平成十四年(二〇〇二)で、すでにひと通りの調査が終了していたが、その石仏調査の結果を、どのように整理してまとめ、広く世の中に発信するのかというところのお

手伝いから関わり始めた。

はじめは、「ものづくりの立場で、何ができるだろう」と悩んだが、仰木というフィールドに入り、みんなで話し合いながら意見を出し合った。

この年に、「お地藏さん」と呼ばれる多くの石仏を、老若男女を問わず、幅広い世代の人々に興味を持ってもらうため、硬い論文や報告書ではなく、石仏の写真等がカードとマップとしてまとめられた。「地藏Cards」と名付けられたカードは、トランプゲームのカードになぞらえて、四種（上仰木♠、辻ケ下♦、平尾♣、下仰木♥）に分かれ、無数に点在する石仏から各地域十三ヶ所ずつを厳選し、合計五十二枚にまとめられた。当初、カードは地域の地藏盆でふるまわれるお下がりのお菓子に潜ませて配布されたり、マップと全種類のカードをセットにし、地藏盆におけるビンゴゲームなどの景品として地域住民の手に渡った。各カードの表は、名前が付けられた石仏（お地藏さん）の写真であり、裏面はマップの位置と対象となる石仏に関するエピソードが紹介されている。（写真7-1（7-3））

同時に仰木の立体地図の制作が始まり、また、天社門と辻ケ下地区の夏の地藏盆行事に参加して、地域の人々とともに手作りのランタンによる灯りの演出。平成十五年（二〇〇三）、圍場整備されたかつての棚田における、インドネシアの伝統打楽器「ガムラン」と地域の小学生たち



写真7-2：辻ケ下の地藏堂でお下がりのお菓子に地藏カードを入れている様子 提供：地藏プロジェクト



写真6：仰木集落内で地藏プロジェクトが聞き取り調査をしている様子 提供：地藏プロジェクト



写真7-3：地藏カード 提供：地藏プロジェクト



写真7-1：地藏Map 提供：地藏プロジェクト

による仰木太鼓とのセッション・コンサートが開催。平成十七年（二〇〇五）、辻のお大師さんで知られる辻ヶ下の真迎寺での元三大師の誕生会に合わせた「豆大師」にちなんだブラ板づくりワークショップの開催。そして、平成二十年（二〇〇八）十月には、地域の氏神である小椋神社鎮座千百五十年祭にちなんで、仰木太鼓会館と小椋神社の境内において「仰木一〇〇〇年のくらし博覧会」を開催した。

地藏プロジェクトは、地藏をきっかけとして、仰木集落の自然環境や歴史、文化、信仰、そして人々の暮らしに関わりながら、地域の人々を巻き込み様々なイベントを企画してきた。

現在も地藏プロジェクトの中核を担って活動する谷本氏は、仰木の石仏や、そこに暮らす人々と接する中で、多くの魅力を感じてきたという。

棚田の風景の中で、自然と共に暮らす人々は、仏教や神道という宗派や教義などの形式にこだわらない包容力があり、常に神仏に祈りを込め、そのご加護としての自然の恵みに感謝している。この空間に生かされていることに畏敬の念を持って日常を過ごすという生活スタイルは、谷本氏たち地藏プロジェクトのメンバーにとって新鮮にうつったのである。

辻ヶ下の地藏盆の行事に参加した時は、地藏盆は単なるイベントじゃないと教えられた。地藏堂に祀られるお地藏さんの前に皆が集まる。賑やかに楽しんで構わないが、年に一度のご開帳であるお地藏さんの前であることを忘れてはいけない。そ

の年に生まれた子ども（赤ちゃん）の写真を展示するスペースも用意されており、谷本氏自身の子供も誕生した年に紹介してもらったことがある。お盆行事の終了後に「盆たたき」といういわゆる「直会（なおりい）」に入れてもらい、自治会の役員さんたちと交流する中で、集落の深いコミュニティの存在も知った。（写真8）

集落や田畑の畔（あぜ）に点在する石仏に感謝しながら暮らす仰木という地域に入らせていただくことで、いわゆる都市生活の中では感じることのできない日本文化の精神性のようなものを肌で感じていると谷本氏は語ってくれた。

（二）中井家の信仰

仰木の四箇村（上仰木、辻ヶ下、平尾、下仰木）には、かつて比叡山中や小椋神社の神宮寺に存在した木造の仏様が、集落内の寺院の飛地境内にあるお堂に安置されている。中でも辻ヶ下集落では、平安後期の作風を残した鎌倉前期に制作されたという木造地藏菩薩立像（国重要文化財）が真迎寺の飛地境内の



写真8：辻ヶ下の地藏盆で地藏プロジェクトが担当したビンゴゲームの様子 提供：地藏プロジェクト

地蔵堂に安置されている。その地蔵さまを地域の人々とともに
お守りされている中井徹さんという方がおられ、この地におけ
る信仰についてお話を聞いた。

中井さんは昭和十八年（一九四三）に仰木生まれ。高校卒業
後、大手音響機器メーカーに就職され、神奈川県横浜市へ。昭
和四十二年に京都支店に転勤を申し入れ、実家に戻り、昭和
四十六年、二十八歳の時に結婚、三児の父となる。

昭和五十一年九月に、食道に腫瘍が発見され、十月に手術は成
功し、無事摘出。昭和六十一年に再び神奈川県へ転勤。家族で
横浜に居住。平成十年に会社を五十五歳で早期退職。仰木に
帰ってくる。

退職後は、平成十一年に仰木小椋神社氏子総代年番取締り、
平成十四年から二十二年まで上仰木土地改良区事務局長、その
後、森林組合事務局長、真迎寺檀家総代、仰木地区活性化委員
会事務局長など仰木集落において、様々な取り組みをされ、現
在に至る。七十四歳。

激動の人生の中、中井さんは、仰木の風習や信仰に学ぶとこ
ろが非常に多くあったという。幼少期の思い出に、近隣で大峰
修験の山伏の方がおられ、その熱心な信仰の姿を不思議に思い
ながらも、いつも自然物や神仏に祈りを捧げる暮らしを眺めて
いた。

また、この中井家は、親村（しんむら）と呼ばれる宮座の座
衆の一員であり、小椋神社に関係する様々な儀礼祭式に関わる。

そこには、儀礼を執り行う長老^{註6}がおられ、その長老の威
厳は大きく、集落のしきたりや、生活の知恵などを日常的に教
えていただいた。時には厳しく叱られることもあり、良い意味
で怖い存在でもあった。

他に、中井家は複数の「講」に所属している。「愛宕講」「葉
師講」「行者講」「大師講」「山の神講」「地蔵講」などがあり、
各講の講員数は、数人から十数人とまちまちで、講員の顔ぶれ
は、講によって異なる。講は毎月行われるもの、年に数回行わ
れるものなどがあり、講の内容は、概ね、当番の家に集まって
講に関する掛け軸を掲げ、経文を唱え、会食するという形式が
多い。

中でも、「地蔵講」は、国重要文化財の木造地蔵菩薩立像を
お守りする最も重要な役割があり、かつては中井家を含む四家
が担ってきた。現在は、中井家のみが地蔵堂のお世話を引き継
いでいる。現在、地蔵堂の地蔵菩薩に関連する行事は、辻ケ下
自治会員と真迎寺の檀家衆^{註7}の年中行事として、一月二十
三日の地蔵汁講（新年会）、八月二十三日に近い土日に行われ
る地蔵講（地蔵盆）、十一月十四日の十夜念仏（数珠繰り）が
行なわれている。（写真9・10）

このように見ると、中井家は、集落の中で様々なコミュニ
ティーに所属し、多くの人とつながり、その中心には神仏が存
在する。中井さんはこのような地域社会で成長し、多くのこと
を学んだのだと語る。



写真10：四名の地藏講の講員の名前が記される木箱の蓋

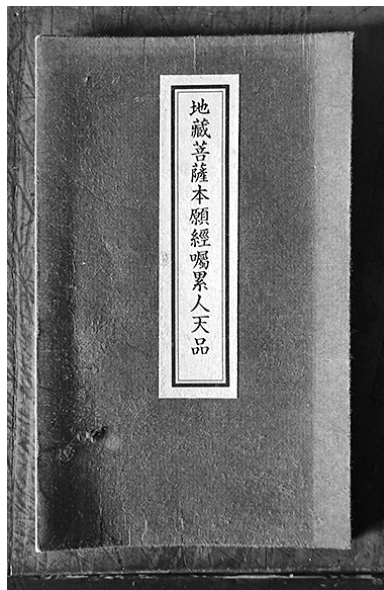


写真9：中井家にある地藏菩薩関連のお経 日常的に地藏菩薩に唱える経本

関東で、大企業の社長室直属の機器の買い付けを担当した時は、多くの他社の役職者と会い、様々な交渉ごとを行うのであるが、少年期に家に出入りする長老や講員の人たちとのコミュニケーションがいろんな意味で役に立ったという。目上の人から多くの話を聞いて、それを大切に思っ、自分の力にしているという「人間信仰」のようなものは、仰木辻ヶ下集落で長老らに採まれて育まれたと熱く語られた。

そして、中井さんの前半の人生で最も大きな出来事であった、大手術の時は、必死で神仏に祈ったという。比叡山横川の元三大師堂に何度も登り、不動明王や厄除けの角大師にお参りし、東大阪の石切不動でお百度詣りもした。そして、お守りをして

いる地藏堂のお地藏さん、家の庭に佇むお地藏さん（複数の石仏）に毎日祈った。科学の力でもどうしようもないこと。三人の小さな子供を残して倒れるわけにいかない。熱心に祈った。その結果として、京都大学医学部の名医との出会いがあり、その方のおかげで綺麗に腫瘍は取り除かれ、今があるとのこと。（写真11）

最終的には、科学（医学）



写真11：中井家の庭に安置されるお地藏さん（石仏）

の力が生命を救ったのかもしれないが、腫瘍が発見された時、傍にお地藏さんがいなかったら、間違ひなく心が折れていたという。お地藏さんがおられなかったら、精神的に自分も、妻も持たなかったと中井さんは語ってくれた。

まとめ

仰木集落は、日本浄土信仰の発祥の地横川の麓に位置し、山上の僧侶の修行を支え、仏門に帰依しながら比叡山と深い関係をつないできた。

今回の論考では、その仰木に多く見られる石仏と地藏菩薩についての信仰を改めて考えてみた。平安時代後期、横川では、高僧たちが極楽浄土と阿弥陀仏を中心とする信仰を発信し、京の都の貴族たちに受け入れられ、鎌倉時代以降、阿弥陀仏や周辺の諸菩薩から地藏菩薩が独立して民衆に支持されるようになる流れが見えてきた。地獄の苦しみを抜く（地獄抜苦）という地藏菩薩の役割が、無知なる故に作善を行うことができず、地獄へ落ちることが前提である庶民に積極的に受け入れられたと考えられるのである。

そして、今もなおその地藏菩薩（石仏）が人々の心を救う役割を担っていることが、聞き取りによって明らかになった。

地藏菩薩の役割は地獄抜苦である。地獄抜苦とは、六道輪廻転生、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天という六つの世界

を魂が行き来する中で作善を積むが、それがかなわなかった時に地獄に落ちる。一度地獄に落ちれば輪廻転生ができなくなり永久に地獄で苦しみを受けなければならないとされている。すなわち、地獄に落ちるということは、どうしようもない状況に陥ったということであり、その窮地を救うのが地藏菩薩であるということが言える。

これを人間の知恵により科学が発展した現代に置き換えてみると、科学の力でも解決できないことを地藏菩薩（石仏）が一旦預かってくださるのではないだろうか。様々なデータを駆使しても未来を確実に予測することは不可能である。病を患った時、現代の発達した医療技術にすべてを委ねるのであるが、それが完治するかどうかということについては、誰にもわからない。地藏菩薩に祈ることで、病気が治るわけではないが、祈る行為や、石仏としていつも見守ってくださっているということが、心に少しの安らぎを与えてくれるのである。予測不可能な未来に対する不安という苦しみを抜苦してくれるのが現代の地藏菩薩である。

今回、仰木という比叡山の麓の集落を眺めながら、そこに息づく信仰を見てきたが、他にも里山の集落には、このようないわゆる民間信仰が、講や祭礼などともに多く伝わっている。

一方で神も仏も存在しない近代社会のイエが存在する。心の孤独や不安が叫ばれる中で、里山の信仰のかたちに今一度目を向けることも大切であろう。

参考文献

- ・ 藺部寿樹『村落内身分と村落神話』(校倉書房 二〇〇五年)
- ・ 小栗栖健治『宮座祭祀の史的 연구』(岩田書院 二〇〇五年)
- ・ 三浦圭一『中世民衆生活史の研究』(思文閣出版 一九八一年)
- ・ 原田敏明『村の祭と聖なるもの』(中央公論社 一九八〇年)
- ・ 萩原龍夫『神々と村落』(弘文堂 一九七八年)
- ・ 高橋統一『宮座の構造と変化』(未来社 一九七八年)
- ・ 原田敏明『村祭と座』(中央公論社 一九七六年)
- ・ 肥後和男『近江に於ける宮座の研究』(臨川書店 一九七三年)
- ・ 肥後和男『宮座の研究』(弘文堂書房 一九四三年)
- ・ 田中久夫『地蔵信仰と民俗』(岩田書院 一九九五年)
- ・ 速水侑『源信』(吉川弘文館 一九八八年)
- ・ 速水侑『日本古代貴族社会における地蔵信仰の展開』(北海道大学文学部紀要 一九六九年)
- ・ 眞鍋廣済『地蔵菩薩の研究』(三密堂書店 昭和一九六〇年)
- ・ 『日本古典文学全集 今昔物語集 二』(小学館 一九七二年)
- ・ 加藤賢治『村座と祭祀滋賀県大津市仰木地区の例』(近江地方史研究第四号 二〇一〇年)
- ・ 加藤賢治『古式祭祀に見るコミュニティとそこに展開する

コミュニティ ション大津市今堅田一丁目の愛宕講と地蔵講を中心にして(成安造形大学附属近江学研究所紀要3号 二〇一四年)

註

- 1、仰木集落内の比叡山の莊園鎮守社であった小椋神社の名残を留める莊宮座の一つ。上仰木と辻ヶ下の一部に居住する人々が構成員となっている。
- 2、二〇一八年一月現在の行政区画では、大津市仰木一丁目から七丁目にあたり、世帯数八二三戸、二二三人が暮らす。
- 3、平尾地区の大倉川水系の棚田は、その土地改良が行われなかったため、現在も旧来の棚田の風景を見ることが出来る。
- 4、厭離穢土Ⅱ汚れた世界を厭い離れるべきこと 欣求浄土Ⅱ浄土に生まれることを願うこと
- 5、参議左大弁源経頼の日記
- 6、親村では、オトナ、あるいはオショウと呼ばれ、一つの株に三名のオトナが設定され、真法、浄光、宗徳、浄恵の四つの株が存在する。合計十二人のオトナ衆を十二人衆と呼んでいる。
- 7、辻ヶ下集落では、その地域に七十七軒が居住し、辻ヶ下自治会を運営するともにほぼ全戸が真迎寺の檀家となっている。

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第7号

発行日 平成30年3月26日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2018

ISSN 2186-6937